みんなの文芸

引間豊作選　投稿数24句

ぎこち無き浴衣に乱る歩幅かな　三沢　新井　叶子

㈲評　浴衣とは本来入浴の折り素肌に着る湯帷子の略語で、木綿の白地に中形の染を施したものが多く、今では夏にくつろいで着る家庭着のこと。古代はこれを着て蒸し風呂に入ったものの、現在では裸で入浴する為、入浴後に着る単衣を言うようになった。これを着て夕涼みなどに団扇片手に歩く姿は粋なもので、時に仕立下しや洗い張りに糊の効いたものなど、少々強い感じでどうしても歩く裾さばきがぎこちなく、歩幅の乱れがちになることを無理なく纏めあげた作者の技量に感服。入道雲の無尽蔵も合歓の花の天女も佳い。

晴天に入道雲の無尽蔵　下田野　藤原　道男

見上げればふわり天女か合歓の花　皆野　新井　茂

川隔つ分教場のさるすべり　下日野沢　引間富美子

草刈りの跡振り向くや風のみち　三沢　新井　民子

全身が耳となりけり蝉時雨　下田野　中田　久恵

廃屋に朋のまぼろし百合二輪　金沢　青木富佐子

初夏や川面まばゆき千曲川　皆野　大沼シヅ子

若人の十年の苦労紫陽花　金沢　関和　トヨ

コスモスや凡庸の日をいとおしむ　皆野　高橋　尚子

朝の雨星の雫のなごりかな　国神　松岡　千恵

山の風頬に涼しや露天風呂　三沢　長谷河ソノ

山百合のお辞儀列なす釜伏宮　三沢　真下　杏子

俳句・短歌を募集

作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して企画課へお寄せください。

8日必着

1人1句、1首に限ります。

中田國太郎選　投稿数13首

をちこちの山百合の香に包まれて今朝庭に立ちふっと息吐く　三沢　新井　民子

㈲評　一読して、ぎすぎすした日常生活から離れて、何かほっとする安らぎを感ずるいい歌である。山が迫っている静かな自然環境の中で、ユリの王様である山百合の強くてむせ返るような芳香が漂う庭に立ち「ふっと息吐く」作者の姿がある。この「ふっと息吐く」が、この歌の命である。自分の情感を、自分の言葉で、素直に表現している点に強く打たれた。ユリの歌は、万葉集でも数多く詠まれているがその中の一首。「夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ」

安井作、結句の「今日も走りつ」に多忙な生活がにじむ。

団塊の声にも我は踏み入らず八十路の介護に今日も走りつ　下田野　安井　光代

たらちねの母の好みし藍浴衣衣桁にかけて盆を迎へむ　皆野　笠原三江子

小農の夫婦で育てし四人の子孝行忘れず逞しく生く　皆野　金子善次郎

あの頃のわが齢なる学童の平和の誓いを聞く原爆忌　三沢　真下　杏子

連れ合いを葬送せし友無量なり作り笑顔で思い出語る　皆野　新井　茂

一票に託した思い国政に生かした暮らしにひたにのぞみぬ　皆野　新井　愛子

草刈機のエンジンの音を背に聞きつ吾も畦草精出して刈る　三沢　新井　叶子

梅雨明けは遅きと蝉の啼き声は一際激し暑き風吹く　金崎　山田　雅子

蹄鉄が錆びて置き有り馬小屋に車二台が繋がれをりし　上日野沢　四方田利男

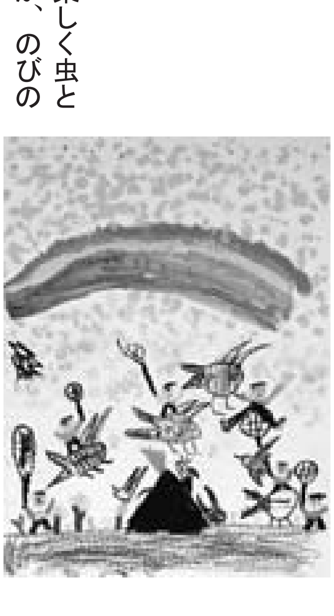
コウノトリ日本の名鳥巣塔より親鳥のもとへ巣立ち飛びゆく　皆野　塩田　千代

気高くも下見て暮らす百合の花ゆれて恋しい亡父の一句は　下日野沢　山本ミチノ

「にじの見える虫とり」

式守正樹（まさき）くん

㈲評　にじの下で楽しく虫とりをするようすが、のびのびとかけました。



高橋　梓（あずさ）さん

（作者のコメント）初めての行書で難しかったけど、選ばれてからは一生懸命頑張りました。今まで、推薦賞をとったことがなかったので、とりたかったけど、とれなくて残念でした。書きぞめでは、推薦賞がとれるように頑張りたいです。